SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

いわゆる悪覇についての一考察：四川省崇慶県元通場の黄氏一族について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今井, 駿 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000470

〈研究ノート〉

いわゆる悪覇についての一考察
～四川省崇慶県元通場の黄氏一族について～

今　井　駿

はじめに

悪覇とか地頭蛇とか、地方を牛耳るごろつき有力者は民国ではありふれた存在であるが、土豪劣紳という言葉もある。土豪が悪覇に当たるわけであるが、劣紳とは一応区別される存在であるといってよいであろう。劣紳は紳士の変質した者、道徳性の劣化した者の謂いであるが、一定の知識を積んだ人物の中に含まれる。これに対して、土豪や悪覇は必ずしも知識の有無を前提としない。彼らはむき出しの暴力やあこぎな蓄財をもって郷曲に武断する存在である。しかし、知識ある悪覇もいたことは小論に述べる通りである。悪覇の具体的存在の様態について述べた一次史料はもとより、二次史料も多いようで調べてみると案外に少ない。小論は『四川文史資料選輯』第25号に掲載された崇慶県政協社会工作組著「川西悪覇崇慶元通場黄匪家族」を紹介しつつ、悪覇の特徴について考察を加えたものである。紹介は原文に沿って一通り行い、適宜コメントをつけるという叙述形式を採る。「」内は原文であり、＜＞内は要約であり、これらに通し番号を振った。

1

1)「わが県の人民は、1920年前後から、四川軍閥の圧迫と搾取を被った外に、『元通国』の黄匪一味の残酷で暗黒の支配を受けた。黄匪の兄弟叔父甥は、元通鎮を基地として、団の運営権を入手してから、全県の金融を支配し、更に進んで全県の反動政権を掌中に収め、軍閥、官僚、党ゴロ、土豪、土匪をこね合わせて一つの反動団閥組織を形成し、極めて残酷なやり方で全県人民を圧迫・搾取し、これが前後30年にも及んだ」157p

これがこの論文の前言にあたる、総括的評言である。次には「一、黄氏的家世」という黄氏一族の簡単な紹介である。要約すると以下の通りである

2）＜ 1866 年清朝は左宗棠を陝甘総督として西北の回民蜂起の鎮圧に向かった。この時蜀軍の武将・黄鼎の甥の黄虎臣は俘虜となった幼児を軍営内に留めて養育した。黄はまもなく粛州で陣没したが、その未婚の妻・劉氏はこの子を自分の義子として黄開運と名付けて崇慶に帰り、黄氏の族長の許しを得て、開運に虎臣のあとを継がせた。

黄開運は成長すると、元通鎮に転居した。趙という姓の婦人を妻として、6 男 1 女を設けた。長男が澤溥（潤余）、次男が澤恩（潤高）3 男が澤寰（潤生）、4 男が澤霖（潤泉、のち黄鰲と改名）、5 男が澤栄（潤琴）、6 男が澤民（潤書）といった。これらが後に郷曲に武断し、全県人民に危害を及ぼす一群の大悪覇となった。＞　157 ～ 158p.

民国 15 年刊行の『崇慶県志』には元通鎮という鎮名は見られない。元通場が鎮になったのはこれより後の事か、清末に元通鎮が元通場に格下げされたかの、いずれかである。

『四川省地図冊』（成都地図社）によると元通鎮は県城の北西にあり、西河という川と、西方懐遠鎮方面から流れてくる川の合流点にあり、交通の便によさそうなところであり、鎮に発達を遂げたのもそうしたことによるものであろう。

3）「黄開運は元通鎮常凌轢に住み、村人を圧迫する保甲になりたいと思い、又地方公金組織に指を染めたいと思ったが、いずれも群衆に拒否された。」158p.

「保甲になりたい」とあるが、甲長や保長になるということは、郷村における一つのステイタスを獲得することであったようだ。地方公金組織の原文は地方公款である。保甲が徴税の組織単位であったから、この二つの願いは一体である。これが「群衆」によって拒否されたというのは、少々疑問である。保甲長の選挙権を「群衆」が持っていたわけではないから。地方有力者に相手にされなかったということではなかろうか？

4）「家族が多く、生活が苦しかったので、黄開運は妻の実家に助けを求め、200 串を（借りたのを）資本として、元通場に恒太昌という名の咀片鋪を開き、次男の澤恩、3 男の澤寰はともに商店に入って見習いをさせ、澤恩は陳という姓の大地主の子分として預け、土豪劣紳とのコネをつける手段とした」158p.

「咀片鋪」とは何の店か不明であるが、ガムのように口に入れて噛む薬草のような物かも知れない。ここでは、次男の澤恩を大地主の「若い衆」として預けたことが、その後の澤恩と黄家一族にとって重要な意味を持ったことを指摘するに留めよう。なお、「子分として」とか「若い衆として」とか訳した部分の原文は「並将澤恩寄拝与陳姓大地主、作為拉攏豪劣手段」である。四川では土

豪が若者を手先として身の回りに置く習慣があった。

5）「清末には各省に新軍が設けられ、四川でも一個鎮が成立する予定であったが、これに先んじて初級士官の育成に着手した。1907年、成都に武備学堂が開かれたが、開運は再三にわたり黄鼎の子・黄世昌の推薦を要請し、長子・澤溥は入学できた。卒業後は新軍の砲兵隊に派遣されて実習し、姜登選の賞賛を博し、隊つき将校に昇進した。4男の澤霖も同様の道を踏み四川陸軍小学に進学した。」158p.

大伯父にあたる一族の黄世昌に頼み込んで澤恩を武備学堂に入れた。大伯父といっても、実の血縁関係にはないが、族的つながりを利用していることが注目される。

6）「1911年6月、全川の人民は清朝の鉄道主権売り渡しに反対し、武装反抗に立ち上がった。開運は長男の澤溥が砲兵隊を率いて新津にいたり周鴻勳の指揮する同志軍を血生臭く鎮圧したため、群衆を悔しがらせるところとなり、遂に夜陰に乗じて家内の老人子供を連れて県下の万家坪西北の瑠璃壩に逃れた。開運は匪賊に殴り殺された。1912年、澤溥は団長（連隊長）になり、県に告訴して凶悪人を懲罰することを要求し、任意に兵を率いて多くの人を捕らえ、ほしいままに人を殺した。元通場一帯の小康の家は彼に匪賊だと誣告されて、家産を没収されたものが十余家にも上った。」158p.

黄開運の殺された場所が元通場なのか瑠璃壩なのか不明である。なお、前掲『崇慶県志』によれば、「蔭生黄開運避地萬家坪遇盗刧害」とある（事紀193ページ）。瑠璃壩で殺されたのは確からしい。また、黄開運が「蔭生」であったという県志の叙述には信憑性がある。義父は軍功をあげた将軍であったから、蔭生に補されても当然のように思われるのである。とすると、開運は国子監の監生だったことがあるわけで、この資料のいうように無から成り上がった人物ということでもなさそうである。

2

次は「二、黄匪幇勢力的成長与拡張」と題された部分である。長くなるので要約する。

7）＜澤溥は砲兵団長となったが、貪婪無能のため、まもなく離職、同学の陳洪範の引きで第一師の軍事講習所副所長となった。澤霖は陸軍小学の学生運動に参加して上海に流浪した。澤寰は兄弟のうちただ1人一小商人にとどまり、地方では何の力もなかった。後に、澤溥、澤霖がしだいに軍内で勢いを得ると、

彼らは軍隊の関係を利用して、次第に民間の団や隊の一部の武力を支配下に置き、(澤寰は) 糧税を軍に代わって徴収する職務を手に入れ、進んでごろつきと結託し、アヘンを販売するようになった。こうして、黄匪の悪勢力が元通場でしだいに成長していった。＞　158～159p.

このように、澤寰は軍閥の2兄弟の力を借りて、元通場でボスとなってゆく。

8）＜1911年、尹昌衡が四川都督となり都督府内に「大漢公」の看板を掲げ、哥老会の組織は急速な勢いで各地に発展、各地の哥老会組織は山堂を公開し、各地のルンペン・ごろつきは地主や坊ちゃん、大小の商人に入会を勧めた。澤寰兄弟も人の紹介で、元通場の坐堂大爺・黄心斎の拝弟となった。又、澤寰等は父・開運のために仇を打ち、人を殺し、多くの財宝をかすめ取り、これは黄心斎に深く賞賛された。澤恩は心斎の支持で成都の商業学校に学んだ。護国戦争の後、川軍は改編され、陳洪範は第4師旅長、継いで第8師師長に昇進し、澤溥も団長、旅長と昇進した。勉強もせず特技もない澤霖でさえ澤溥の引きで営長(大隊長)・団長になった。澤寰は黄心斎の勢力に頼り、多くの人とつきあったが、そのうちに心斎の権力ある地位に取って代わりたいという思いが芽生えた。それと同じ頃、黄開運の妻の弟であだ名を趙「寒林」という男が、盗癖があり、黄心斎に一再ならず捕らえられては処罰を受けていたので、黄家の「面子」に傷がつけられた。そこで、上述の下心もあって、澤寰等は黄心斎は大匪であると誣告して、軍閥・劉成勲に兵を元通場に派遣して黄心斎を逮捕することを願い出た。黄父子は事前に逃亡して無事であったが、これによって澤寰は、一躍元通鎮の顔役－通議郷団総兼団練分局長となった。これより、黄匪の一党が人民に危害を加える「元通国」の深くて堅固な巣窟が築かれた＞159p.

軍閥は団閥を育て団閥は軍閥に奉仕する（もちろん自分の利益を十分確保した上で)。次には、団閥の団運営の実態を見よう。

9）＜1914年から、崇慶県の各郷各保は地主階級の利益を守るため、みな保衛団をはじめた。澤寰が権力を手にした当時、通議〔郷団総〕の所轄は元通、公議、観音の三郷で、保甲長が強壮な農民を選んで、定時に操練をし、いわゆる「練丁隊」を組織する外、大地主の持ち物である廟宇や祠堂を選んで常練隊1～2班を別個に駐屯させ、班長は澤寰が腹心を充てた。当地の人民はその月給、銃と弾および服装等の費用を負担し、戸ごとに頭割りに徴収したが、大地主や勢力のある者は一文も出さなかった。多くの農民は月ごとに半升、一升あるいは一斗などと不定量に米を供出しなければならず、もしも困難があって供出できないと、団丁に拘留され期限をつけて納めなければならなかった。

1917年、澤寰は「四川省修正団練奨罰条例」に基づいて、更に人民の財産を搾り取った。彼は手先の班長たちに壊れた銃を購入させ、これをちょっと修理して、各保の戸口の財力に応じて、一挺ないし二挺を強制的に購入させたが、一挺たった十余元なのに、30元も要求し、その後も何回か値を上げて50元にもなった。と同時に、「借用」の名目で、銃は団練分局に収めるか常連隊の使用に供した。このようなやり方で、一年おきに人民を搾取し、1回当たり1000元以上を掻き集めた。

元通場では10日に3回市が立つが、澤寰はその時必ず決まった茶館や団練分局に行き、人々のもめ事を調停した。彼はいつも金あり勢力ありの人物と事前に結託し、金も勢力もない人を、彼に理があっても理がないと言いなし、ちょっとでも抗弁しようものなら、大声を張り上げて叱責するか、さもなければ団丁に「おれが関わるからもう一度話せ」といわせた。ひどい場合には「裁判に持ち込む」と脅迫され、礼金を払うことで事をおさめた者もいた。

澤寰は毎年不定期に一斉に一回ないし二三回、あらゆる保、甲の壮丁に自分の武器を持って指定した場所に集中させ、点検した。多くの農民が武器を持つのが困難であったが、すると、澤寰が規定し、（購入を）請け負った刀や矛（値は高く質は悪い）を買わなければならず、集まらなかった人は、罰金か拘束の処分を受けた。当然、澤寰は団隊点検の費用を（自分宛に）落とした。＞　160p.

ここでは、団閥経営のからくりが曝露されている。また、澤寰がもめ事の「仲裁」役を茶館等で演じているが、これは哥老会の大爺などが行ったことの真似である（これについては拙稿「中華民国期の四川省における哥老会の組織。活動の実態について」『人文論集』48号の1で紹介したことがある）。

10）＜澤寰が団総の時は、まさに四川軍閥が防区を区切って割拠していた時代であり、軍閥は防区内に多くの関所を設け、苛捐雑税を徴収した。1918年からは税粮の預徴が始まり、次第に年に5～6年分の税粮を預徴するようになった。澤寰はこの機会を利用して、納税の期限が来ると保甲に催促して税粮を集めさせるが、（軍閥に支払う前に）集めた税粮を手元において投機に使ったり、銭荘を開く（後には銀行に改めた）資本とした。軍隊から税粮取り立て委員（原文は提款委員）が派遣されてくると、アヘン、酒、売春婦、賭博等で彼らをていよくあしらい、彼が握っている現金の一部を委員に渡し、自分は対策を講じて借用したのだと偽り、同時にまたいくらかの百姓を閉じこめてあるのを委員に見せ、自分が税金取り立てに尽力している証拠とした。こうした手口で蓄財し、澤寰は団総となって10年も経たぬ内に、上等の水田300余畝、水車屋数軒

を買い、商店を5軒も開いた。＞　161p.

澤寰は納入すべき額をごまかして自分の懐に入れてしまっており、これは明らかな犯罪であるが、私は、徴税と納税との時期の時間差を利用して徴税人が金を稼ぐ可能性、またその事実を紹介したことがある（拙稿「中華民国期の四川省巴県鳳凰場第七保の団款等徴収記録册をめぐる一考察」『人文論集』47号の1)。たとえ10日でも5日でも、商人に日貸しして利鞘を稼ぐことはできたはずである。澤寰はこれと同じようなこともやっているわけである。

11）＜団練を運営するために、澤寰は多くの土匪を招き入れて腹心とし、用心棒に充てたり常備隊の班長や、隊長とした。これらの略奪が本性となっている匪徒は駐屯地で悪事を働いたり、よその土匪と一緒に誘拐等をしでかした。澤寰はまた元通場の哥老会の大爺であり、各地の哥老会員が元通場にアヘンを売り込みに来たり、賭博をしに来たり、元通場の匪人と組んで強盗や窃盗をやったりした。また、本籍地で逮捕されるのを恐れた者が庇護を求めてやって来た。澤寰はこうして悪に交わることますます深く、行いは悪くなる一方だった。彼は初めのうち賭博は新年や季節の変わり目だけに限っていたが、やがて経常的になり、百姓や勢力のない商人の金を巻き上げるようになった。また、アヘンを持ち込んで元通場で売らせ、煙幇を組織し（アヘンを武装して運搬する組織）、万家山区や汶川等の僻地を通って懋功に行き大量のアヘンを仕入れて来ては販売した。これらの犯罪行為はみな澤寰の支配下の土匪やごろつきが、彼に成り代わって行ったのである。元通場にはこの類の悪漢が大手を振って横行し、好き勝手な事をしていた。後に、澤溥は上官の陳洪範にクビにされたが、澤寰に頼んで陳の兄弟分（あだ名を麼師長といった）を誘拐させ、鬱憤を晴らした。澤寰は手下の匪賊に誘拐させ、誘拐された人物（肥猪と呼ばれた）は通常彼の家に閉じこめられていた。

1928年になると、元通場はすでに匪の巣窟、アヘン市と賭博場でいっぱいになった。澤寰は一切のアヘン販売、賭博、誘拐、こそ泥の所得に対し、彼の哥老会組織の第5牌である管事を通じ、2割から5割の上納金を取り立て、従わない者は元通場の統制範囲での活動を許さなかった。当時、崇慶県の2鎮（三江、懐遠）6郷の地頭蛇は、みな黄匪の一党の勢力と対等に抗争することができなかったが、それは黄家の長男・澤溥が元高級軍人の資格で上から澤寰を保護しており、また四男の澤霖も成都の軍人・政客の各方面との連係・疎通があったので、黄匪一味をして元通場を基地として成長させたのである＞　161～162p.

澤寰はアヘン等の闇商売でももうけを採ったが、哥老会の組織がこの面で大

きな役割を果たしていた事が注目される。また、団閥・澤寰と軍閥・澤溥・澤霖の兄弟関係も元通場ばかりでなく、崇慶県における澤寰の地位を強固なものにしていた。他の兄弟の動向を追ってみよう。

12) ＜1918年、次男の澤恩が長兄・澤溥の勢力に頼りながら、地方の人民を脅したり買収したりして、選挙を操り、四川省議会第3期の議員に当選した。彼には、学識もなく、弁舌の才もなく、議員になっても、一つの議案も出さず、発言はごく少なく、ただ他人の意見に附和するだけで、人から「賛成議員」と馬鹿にされていた。しかし、彼は、このいわゆる「民意」機関における地位によって、省方面でゆすりたかりを行うだけでなく、崇慶県に対しても常に県政に直接に干渉し、県長は黄一家をていよくあしらわなければならなかった＞ 162p.

澤恩の学歴は商業学校卒業であるから、当時としては成都当たりの田舎ではそれなりの価値が認められたのであろう。選挙民を買収したとあるが、第1回省議会選挙の選挙資格は、直接税を年2元以上納める者、500元以上の財産を有する者、小学校卒業もしくはこれと同等の資格を有する者、と決められていた（呂実強「民初四川的省議会、1912～26」『中央研究院近代史研究所集刊』第16期、257ページ）。制限選挙ではあるが、制限の枠は比較的緩やかである。選挙民の数はそれだけ多く、金もかかったことであろう。それはともかく、一省議員の資格で県政に直接口出しをするという越権行為も、軍閥の兄弟や団閥の兄弟とのチームプレーだからこそ可能だったのであって、当時の省議員にそれほどの実力があったとは思われない。しかし、名誉職ではあり、一定の権威は持っていたであろう。

13) ＜澤霖は、「黄家のあばたの四男」として有名で、性格は極めて驕慢であり、陸軍小学出身の資格によって、川軍各師・旅の大物と同窓の関係を持っていた。1924年に澤溥に陳洪範打倒を嗾けて失敗し、澤霖は元の上司・劉成勲にたのまれて警備司令となったが、後作戦時に指揮に従わずクビとなり、今度は24軍の劉文輝に頼まれて特科司令となった。配下には1個団余の兵がおり、まだ乳臭い甥、澤寰の子・黄光輝も澤霖の引きで営長に充てられ，後に第5団団長に昇進した。＞ 163p.

澤霖のように軍閥たちの軍から軍へ渡り歩くのは珍しい事ではなかった。なにしろ軍長や師長からしてが、離合集散を繰り返していたからである。なお、劉文輝の24軍とは国民革命軍第24軍のことであり、この部隊番号を国民政府から授かったのは1926年のことである。したがって、澤霖は劉成勲の軍に約2

年は勤めていたということになる。

14）＜5男の澤栄は専門学校卒業の資格を持ち、かつて県の局長になったことがある。ところが、澤霖が24軍の特科司令になってみると、人も武器も1個団より多く、そこで数個団に再編成をした。その際に、澤栄も長衫を着たまま第6団団長に任命された。軍事知識などは毛頭も無く、常に人に馬鹿にされていたが、後に24軍から蒋介石の廬山訓練団に派遣されて学習した。この関係を通じ、澤栄は蒋介石一味の崇慶県に於ける有力な走狗となった。＞　163p.

身内だからというだけで民間人の澤栄までもが団長（連隊長）にいきなり抜擢される。こういうでたらめが24軍では本当に許されていたのであろうか？信じがたいが、事実であれば致し方ない。また、劉文輝は30年の中原大戦に際し反蒋介石の立場を明確にするから、1933年7月に設置された廬山訓練団に澤栄を派遣したのは事実的には疑わしいが、後述のように、澤栄が蒋介石系統の人脈をもっていたことも明らかであり、何とも言えない。但し、廬山訓練団は37年の日中戦争開始まで、ドイツ軍顧問指揮下に下級将校の訓練を目的として設立された物であり、澤栄のような未経験者にはよい軍事体験の場になったであろう。

15）＜1925年、澤栄は農業専門学校を卒業後うまく立ち回って崇慶県実業局長に任命された。しかし、前任の肖志仁は地方を多年にわたり支配してきた大土劣の団練局長欧煥堂等の人と血盟の兄弟分の関係にあり、澤栄との交代を拒んだ。澤栄は軍閥・楊森（当時四川軍務督理）の妾に頼み込み、この妾の英文教師の金豹廬の妻・周浣芳が代わって説得に当たり、ようやく肖に地位を譲らせることができた。澤栄は実業局長の地位に登り詰めると、澤溥、澤霖が又軍隊の関係を利用して澤栄のために運動し、彼を24軍の防区の青神県の県長にならせた（県長になって後に団長になり、廬山訓練団に参加したのである）。澤栄は崇慶県に帰ってくると、大邑県の軍閥、悪覇地主の劉文彩、劉升廷、劉彦儒等の下に投じ、崇慶県の悪覇・王耀祖、呉某、施某、陳某、雷某等の人を引き込んで地方財政を牛耳り、進んで崇慶県財務委員長になった。抗日の軍が起こると、又全県の土豪劣紳と結託し、県参議会を操り、議長に推された。こうして黄匪一味は遂に全県の財務と地方の「民意」機構を制圧したのだ。＞　163～164p.

上の15番と紛らわしいが、澤栄は「廬山訓練団」から帰ると部隊に戻らず、崇慶県で財務委員長となり、抗戦勃発後は県参議会議長に収まった。文中に劉文彩の名がでてくるが、彼は劉文輝の実兄であり、彼とのつき合いから見ても、

澤栄が蒋介石の手先になったとは考えにくい。

16）＜6男の澤民は兄たちの支持や画策によって、劉文輝の妾のつてで岳池県の徴収局長になったが、本人が到着するより先に、接収・移管のために田歳豊という崇慶の悪覇地主を派遣して多くの金を手に入れ、自分のために崇慶県に田産40畝を購入した＞　164p.

以上で黄開運の6男全ての経歴のあらましを見た。次には、彼らの傍若無人の振る舞いについて、更に見てゆく事にしよう。その前に、一応黄家の面々を系図にしてまとめておこう。

肩書きはこれまで出てきた内の最高位（澤恩の子・光華は21）に後出）

黄鼎―黄開運
- 澤溥（旅長）
- 澤恩（省議会議員）―光華（聯保主任）
- 澤寰（崇慶県団練局元通分局長）―光輝（団長）
- 澤霖（団長）
- 澤栄（崇慶県実業局長・財務委員長・県参議会議長）
- 澤民（岳池徴収局長）
- 女

3

17）＜大悪覇・余棟廷は大邑の大悪覇地主・劉文彩の勢力により、邛崍の徴収局長に当たり、崇慶県団練総局長並びに五県聯防指揮を兼任しており、一時の気炎はたいしたもので、元通分局長の黄澤寰などは見下していた。黄澤霖は邛崍県に駐屯していたが軍の風紀が大変悪く、余は劉文彩を通じ澤霖の部隊を崇慶に移駐させることにした。澤霖の先遣隊は「打館旗」を団防局と壁を隔てた文昌宮に立てたところ、余棟廷はこれを聞くと卓を叩いて憤り「黄の四男が一体なんだっていうんだ。敢えて俺の県に駐屯する気だが、3日のうち追い出してやる！」と悪態をついて、団丁に「打館旗」を抜いて便所の中に棄てさせた。澤霖は激怒したが、余の勢力が大きくて報復はままならなかった。密かに澤寰に余をやっつける方法を頼んだ。3年後、黄鰲（澤霖）は成都に於ける勢力も大きくなり、澤寰もまた余棟旗を倒さなくては勢力の拡大ができないので、兄弟で相談した結果、余を暗殺することに話がまとまった。澤寰は団防の分隊長に温江県の哥老会の親分の江耀廷と連絡を取らせ、江は「渾水大爺」杜奎に兄弟分3人を元通によこすよう、澤寰に成り代わり要請した。しかし、この時は暗殺に失敗した。1929年夏、待ち伏せして暗殺に成功した。県長は下手人を逮捕

したものの、黄の勢力を恐れて半年で釈放した。これより、黄匪一党は2鎮6郷の大小の土豪劣紳と結託し、汚職・横領などをほしいままにし、誰も敢えて咎めはしなかった。続いて、澤寰は県城で団練総局局長になり、同時に哥老組織の唐安総社を組織し、全県に独覇して、川西の典型的な悪覇となった。

澤寰は一年余り（県城で）団練総局局長を務めたが、又元通場に戻り、分局長を兼任したが、（総局長の地位は？）別の悪覇に後を継がせた。年越の節目ごとに後継者は必ず元通場に自ら赴き澤寰に祝賀を述べ、地方財政のうちどの項目が潤っているかを報告して澤寰の指示を仰ぎ、その上で財務を執行し、私腹に入れる分があれば、最多の部分を澤寰に送った。＞　164～165p.

こうして、暗殺の手段を弄した結果、澤寰は県の団練総局局長の地位にまで登り詰めた。県長は無きも同然で、県の事実上の支配者となった。まさに悪覇の典型というにふさわしい。次に5男の澤栄の活動を見よう。

18）＜澤栄が崇慶県財務委員になってまもなく、蒋介石の勢力が四川に侵入し、澤栄は国民党県党部に潜り込んで委員となり、また澤溥の支持の下に唐安総社を組織し、自ら総社長となった。＞　166p.

上の17）では、唐安総社を作ったのは澤寰とされているのに、これは矛盾しているように思われる。但し、澤寰が組織したのは1929年のことであり、蒋介石の勢力が四川に入ってきたのは35年のことであるから、時間的には矛盾はないが、澤寰の作った組織が一旦無くなったとでも考えないと辻褄が合わない。それはともかく、澤栄は哥老会の組織を利用して各地の土匪・悪覇勢力と組んで悪事を働いた。

19）＜澤栄は一面では劉文彩と義兄弟の関係を結び、劉に代わって田野を買ってやったり、アヘンを売ってやったりした。黄匪一党の支持下に各郷にみな唐安総社の分社ができ、各郷鎮長および保甲長等はみな次第に黄の一党となるか、それと密接な関係を持つようになった。1946年県長・李之青は澤栄の子分たちがあちこちで強盗を働き、アヘンを売り、誘拐をし、これについての訴えが相継いで来るので、澤栄の子分たちを庇ったり、澤栄と主従関係にある4人の郷長をクビにした。これに激怒した黄一党は澤霖が成都で大活躍をして宣伝に努めた結果、李之青は県長を罷免され、行政督察専員の某も記過の処分にあった。これ以後、黄匪一党の気炎は天をも焦がすほどになり、働く悪事はより多くより大規模になっていった。＞　166～167p.

20）＜4男の澤霖は、1943年の四川省参議会の改組に際し、種々の方法を講じて四川省参議会に潜り込み、参議員となった。この地位を利用して彼は、弟

や甥たちの略奪や人民への危害を加えた行為を庇ってやった。たとえば、澤栄に嗾けて糧食部が四川省に返した糧款3000余万元を中飽するのに参加させ、仲間と爪分させた。その金で各方面に活動し、李県長を辞職に追い込み、匪首の陳福安、宋国太等を招撫し、大隊長とした。彼は、上から下まで県政を牛耳り、厳然たる、「元通国」土皇帝の太上皇であった。1947年、澤霖は利益誘導や脅迫等のあらゆる手段を使って、国民党の立法委員に当選した。これによって黄匪の兄弟や甥等の罪業は、一段と有力な庇護を得ることになった。＞　167p.

澤霖が太上皇であるから、土皇帝は澤寰であろう。最後に澤恩の子・光華の登場である。

21）＜1936年団総の名称は聯保主任と改称された。澤恩の息子の光華が（澤寰の）後を継いだ。光華の手段の毒辣なことは、叔父の澤寰の数倍以上で、一門の勢力をバックに、任意に税を取り立て、随意に人民を拘禁し、なにかというと罰金を課した。たとえば永利橋を造ったとき、民衆には磚を運ばせ、運搬費に自分の取り分を上乗せした。軍粮を集めるときには収めた軍米で高利貸しと投機を行い、帳面上は100元だが、彼は必ず20～30元を自分の懐に入れた。このため、連保処には税金が納められないで逮捕された人々が70～80人もいた。もっとひどいのは時機を見て婦女を強姦し拘禁したことである。民衆はこれに痛憤したが、どうにもならなかった。1939年、徐楚が黄澤霖夫婦と黄光華の全家族を殺した（詳細は後述）。澤恩の子・黄光輝が元通の聯保主任のあとがまとなった。彼は又元通の哥老組織の頭であり、凶暴残忍なことは父や兄よりもひどく、「元通国」の最後の覇王となった。＞　162p.

ここで光華を「兄」としているのは「堂兄」という意味である。光輝の罪行は後に譲る。以上には、黄一家が元通場を足場に全県をも支配下に置く大悪覇に成長してゆく過程が描かれていた。ここに見られる顕著な事実は、黄家が単に軍閥や役人を輩出して栄えただけではなく、元通場に根を張る澤寰という人物があってこそ、兄弟たちが一体となって勢力を張ることができたのではないかと思われることである。澤寰は学校にも行かず、元通場にいて団総の地位を手に入れ、哥老会の組織を作って勢力を伸ばしていった。このような澤寰の存在は軍から軍へと渡り歩いたり、名誉職でしかない四川省議会議員や他県の役人になった兄弟たちに依るべき根拠地を提供したのである。もちろん、澤寰も兄弟たちの援助を受けつつ大悪覇への道を歩んだのであるが、軍人でも役人でも無い彼はしっかりと地元に根を生やして、人民の膏血を搾り取り、人民の上に君臨したのである。

以上で原文の第二章は終わり、第三章は「黄匪幇危害人民的罪悪活動」と題されているが、その中の小見出しは以下の通りである。

（1）地方政権を操縦する

（2）財政金融を操縦し（現物税たる）食糧を私する

（3）国民党・三民主義青年団と各種の組織を支配する

（4）匪賊を養いほしいままに略奪・焼殺する

（5）人民の財産を略奪する

（6）無残に民衆を傷つけ、殺害し、婦女を犯す

以上の項目から分かるように、これまでも見てきた所をより詳細に述べた部分が多い。

しかし、貴重な事実も述べられているので、その点を中心に紹介して行きたい。このため、原文を大幅にカットした要約になるが、了承されたい。

4

22）＜澤寰は哥老の唐安総社の関係を利用して、各郷鎮（30郷鎮）に手先を配し、「炮選」の方式で、各郷鎮長ないし保甲長の地位を占拠した。同様にして、各郷鎮の参議員を「炮選」して、県参議会を組成し、澤栄を県参議会議長に当選させた。＞　168～169p.

「炮選」の意味がよく分からないが、お手盛り選挙、といった意味であろうか。

23）＜国民党県党部の書記長・羅雨時は、澤栄が呼べば来たり、叱責すれば去るという具合に、澤栄に忠勤を励む奴隷であった。澤栄は三民主義青年団の指導者の1人であり、また中国青年党の指導者であり、また農会、教育会、工会、漁会等の法団の指導者はみな澤栄の子分でないものはなかった。＞　171p.

24）＜歴代の県長は着任すると、必ず澤栄に挨拶に行き、どんな行動にも必ず澤栄の同意を得てはじめて障害無く進めることができた。法院の判決も、黄氏に不利なものが出ると、改めさせ、従わない裁判官を殺してしまったこともある。また、全県の小学校長の任免は黄の腹心で文教界の大悪覇・張俊才を通じ、資格、経歴の審査および経費、賃金等の条件等をもって統制した。県中学校長は省教育庁の委任であったが、必ず黄党あるいは黄匪の同意があって初めて着任できた。＞　171～172p.

以上の23，24から、黄家が政治、武装だけではなく、司法、教育、各種公認の社会団体までも支配下に置いていた事が分かる。国民党は県委員会さえも悪

覇に牛耳られる存在であった。

25) <（土匪を養って手なずけた澤寰であるが、その規模は相当なものであった）。1939年、大匪首・周四維を聯防大隊長、保商隊長（アヘン売りの保護）と山防隊長として、毎年山に入り懋功一帯に行かせた。2000人の武装人員を率い、アヘン200～300坦を運び、沿路の住民を騒がせ、零細なアヘン商から奪ったりした。平時には四方に出て略奪や誘拐、牛泥棒をし、ややもすれば事件当事者や誘拐された人物を殺した。1942年から45年まで、崇慶、汶川の辺境で往来する客商を略奪した。1948年、四川省考察団を集団で襲い、30余人を殺し、ピストル30余挺、現金数万元を奪った。> 173p.

26) <黄光輝の妻の兄の張質文は、妹が黄匪家に嫁いだ後、元通鎮で8年鎮長を務めた。匪首たちと結託して略奪、誘拐を行い、居ながらにして分け前に与った。> 173p.

張質文はさしずめ閨閥というところであろうが、このようなネットワークも利用して、黄一党の悪勢力は成長していった。

次には人民財産の略奪を通じて彼らが蓄えた財産の目録を見てみよう。

27) <人民を搾取して土地を買い家を建てる。

黄家家族にはもともとは一片の田土もなかったが、澤溥が団長、旅長になってから、軍閥割拠を利用して、兵士の給料の頭をはね、又武装隊を派遣して大小凉山辺区から大量のアヘンを買いつけて帰り、駐屯地や元通場に持ち帰り、澤寰を通じて売りさばいた。又、団での使用に貸し出すという名目で銃と弾を高く売りつけた。彼らは大量の金銭を集中して田を買い、家を建て、高利貸しを行った。澤寰は更に団局の職権を利用して、任意に軍粮、塾款、預徴、包税を集めることにかこつけて、門戸捐および団経費等の名目で、民衆を搾取し、その金で田を買い家を建てるほか、油、塩、アヘン等の独占性の強い商売を経営した。1924年から36年の間に、彼は前後数回銃を買い「治安を維持する」という名目で、元通の居民500余人に頼もし講に毎人5元で入会させ、事後は講に金を返すでもなく銃を講員に手渡すでもなかった。これと似たりよったりの手口で彼らが築いた財産は下表の通りである。

田地と家屋関係

黄澤溥　田764畝、家屋2軒、街の貸間（街房）25間

黄澤恩、黄光華　田390畝、家屋1軒、街の貸間　5間

黄澤寰　田450畝、家屋1軒、街の貸間　18間

黄光輝　田430畝
黄澤霖　田970畝、家屋2軒
黄澤栄　田500畝、家屋1軒
黄澤民　田100畝
商業に関するもの
水車48軒、商店3，銭荘2，薬屋1
工鉱企業関係
鍋製造工場1，製紙工場1，材木工場1，炭坑1
投資に関係
崇慶県水電廠、マッチ工場等。成都と各地への投資は含めていない。＞　175～176p.

黄一家の土地所有額の総計は3604畝にも上る。当然これは高額小作料で佃戸に貸し出した事であろう。原文には小作料の高さよりも、800元の押金を通貨の変化に応じて4度も書き換えることによって、2斗米の法幣にしてしまった等の、搾取の巧妙さが描かれている。黄光輝は因利局を開設して高利率で米を貸し、厳しく取り立てた。彼らの悪辣さと冷酷さ残忍さは原文の至る所で述べられているが、これ以上は紹介しない。

ただ、団閥としての税の取り立て項目を参考までに紹介しておこう。

28）＜壮丁費　毎年3回、毎回米約120石、米を納める金のない者は、その他の物で換算する。
子弾費　毎戸毎月米5斗
自治費　住民の経済状況に応じて課す。貧農の楊某は41年1回に3斗取られた。
軍服費　適齢の壮丁に各1着ずつ、値は2斗米のもを4斗取り立てた。
門牌捐　毎年門牌を換え、41年には門牌一つにつき米5升だった。
銃　捐　毎戸1挺、値は不等
積穀捐　田10畝につき穀5石
区治安費　毎戸毎月米5升から1斗
以上の外に不定期なもの
国旗費　毎旗の制作費は米2升の所、1斗を徴収
灯籠費　毎街1個、制作費は米3升の所、1斗2升を徴収
修街費
柵の建設費

樹苗捐　街の通りの緑化・美化を口実に、毎戸1株、米5升

この外に民衆を愚弄して財物を詐取。例えば

発彩票　（どんなものか不明）2分の1をもうける

估　膘　豚肉一塊りを吊し、人に重さを当てさせる賭け。居ながらにして30%の手数料を徴収

輔幣の発行　一寸の竹片に鉄の烙印を捺し、1千文として流通させる

講演経費　30年に昌園和尚に説法を委託、米300石を徴収

功果捐　（どんなものか不明）30年に1000元を集める

修橋捐　毎回若干の奉加帳を作り、四方で集める。経済状況を見て銭の多少を決める。集めた金の決算報告はなし。

吃喜銭　他人に収入があると幾分かをこの名目で取る

拝年礼　年越しにあたり住民に贈り物をくれるよう強請する

嫁女費　36年、澤寰の娘が嫁いだ際に、住民に毎戸30元以上を要求＞177～178p.

自分の娘の嫁入り祝いまで強要するのであるから、これはもう土皇帝そのものである。しかし、27）の財産目録には各種の工場、炭坑の経営（これは県志によれば旧式の物だったと思われるが)、水力発電所やマッチ工場への投資などが見られ、彼らが旧態依然たる「封建」地主ではなかった事を示している。悪覇としての所業はいうなれば、原始的蓄積のための剥き出しの暴力であり、ブルジョア的発展の可能性を秘めていたとも考えられる。といっても、彼らが元通の土地を追われ、ため込んだ財産を資本に転嫁できたなら、の話ではあるが。

5

黄一家の悪行に民衆はどうしていたのであろうか？　ただ黙って従っていただけである。が、1人例外がいた。

29）＜それは元通場の元営長の退役軍人・徐楚である。彼は、黄光華に妻を犯され、これを羞じて灌県の王婆岩という山中に身を隠した。ここは邪魔外道の巣窟として恐れられ、中には劉湘や劉成勲といった軍閥をたぶらかした周神仙という人物もいた。しかし、ここに住んでみると、絶対大部分の人は農業と狩りで生活をし、余暇に武術の鍛錬をしていることに徐楚は気づいた。山人は純朴で正義感が強く、徐楚の黄匪一家の悪行についての話と彼の身の上話を聞くと、みんなが深く不平を抱いた。そこで、1939年春の末、徐楚は約100人の助っ人を得て、会門の信徒を装って元通場に侵入し、正午に3隊に分かれて復

讐に打って出た。徐楚は理髪店にいた黄光華をその場で殺し、ついで黄家に入って光華の子供3人（内1人は光華の従兄弟）を殺し、婢女と光華の妻を殺した。別の一隊は澤寰の家に侵入し、門番を殺し、澤寰の頭部と腹部に数太刀あびせ、銃を鳴らした用心棒と澤寰の妻を殺した。第三隊は澤溥の家に侵入したが、澤溥夫妻は隠れて見つからなかった。午後、徐楚は部隊を整えて茶館に至り、黄一家の罪悪と自己の破綻と復讐の経過について大衆に説明すると、悠々と隊を率いて去った。住民の中には線香を立てて感謝する者もおり、県人はこのニュースを聞くと暗中快哉を叫んだ。澤寰夫妻と光華一家を殺された黄一家は、教匪の反乱だといって大騒ぎをし、澤霖は四川省政府を通じ国民政府に係員を派遣して調査するよう請求し、その結果は、無関係な元通場の大衆18人を殺して復讐とし、溜飲を下げた。＞　182～183p.

徐楚とこれに同情した山民によって黄家の中枢・澤寰と光華が殺された。悪覇の残忍な支配は、復讐を残忍なものとした。罪もない子供までが殺されたのである。無力な元通場の民衆はこの復讐劇に快哉を叫んだが、結局はまた無実の罪を着せられた18人が、悪覇の鬱憤晴らしのために犠牲となった。もっとも、抗日戦争期には小学校の図書館から延安発行の『群衆』等の出版物、重慶の『新華日報』や新華書店、生活書店等の図書が発見され、黄一党の手で焚書の処分にあっているから（183p.）、教員の中には「元通王国」に対する反抗の機会をうかがっていた者もいた可能性は十分ある。しかし、彼らは地下に潜んでじっとしていた。「元通王国」は人民解放軍という外部からの力で粉砕され、人民は解放されたのであった。黄匪一党は48年国共内戦の中で「反共救国」の軍を起こした。しかし、49年12月成都が平和解放されると、澤霖は急いで崇慶に帰り、元の「反共救国軍」を「協作軍」と看板を塗り替えてビラを撒き、早くから解放軍に呼応する活動を進めてきたかのように装い、「共産党と共に政権を握」ろうとして、一党の子分たちを集めて政県府で「民主座談会」を召集して県局の責任者を選出し、崇慶県を「平和解放」しようとした。澤霖は布告を出して、自らを協作軍司令員、澤栄は副司令員、光輝等を4個の縦隊隊長に任命する等々の工作を行った。しかし、中共は1950年1月、川西公署と温江専署の指導の下に崇慶県政府を樹立するよう指導、黄一党の策謀は成らなかった。そもそも、人民解放軍は入川に先立ち各県の情況について、かなり詳細なパンフレットを作成して持ってきており、崇慶県の黄一党について知らなかった方がおかしい。澤霖等は各県の悪覇を連合して「反共救国」の旗を再び掲げて活動したが、3月中旬、黄光輝が捕らわれて、武力反乱は鎮圧された。11月19日、黄澤霖、澤栄

とその手先の18悪覇が人民法廷に掛けられ死刑に処せられた。観衆は4万余人であった。澤溥は4月22日に処刑され、光輝は3月に成都で処刑され、澤民は成都で労働改造の途中で教育を受けぬまま死去した。

おわりに

以上「元通王国」と呼ばれるほどの権勢を誇った黄氏一家について見てきた。気のついたことはその都度コメントしてきたので、あらためてここに書くことはもうあまりない。私にとって残念なことは、人民裁判の場面が描かれていないことであった。おそらく、民衆が我も我もと苦しみを訴え（苦訴）、被告の罪状をあげつらい、大方興奮が冷めた所で裁判官（解放軍の関係者がなったのであろうか？　これもこの資料では分からない）が判決を提示し、民衆に意見を求め、同意の声の下に判決が言い渡され、引き続いて処刑が行われたと考えられる。弁護士などはいない。悪覇のために弁護するのは悪覇の手先と見なされたことであろう。このような黄氏一党に対する処分の仕方には、なにか腑に落ちぬものがある。民衆が黄一党に対して怨み骨髄であったことは分かるが、開廷から処刑まで、余りにも期間が短か過ぎるのではなかろうか？　怨みを目に見える形で一刻も早く目にしたいという、民衆の素朴な実感に対し、解放軍ないしは中共の指導者はこれを押さえる必要があったのではないだろうか、そう思うのである。30年来の抑圧がなぜ続けられたのか、民衆はなぜそれほどに無力であったのか、民衆自身が自分の無力さへの悔恨の念と共に、再び悪覇を出さないにはどうすればよいのか、どのような村作りが必要なのか、こういった問題を突き詰めて考える方法なり場なりを提供するのが、政治的指導者たる中共の責任ではなかったのではあるまいか？　悪覇の所業を曝露し公開処刑によって民衆の支持を得るのは、たやすいことだ。だが、この限り、民衆の怯懦は問われることはない。武力によって解放された民衆はみな被害者である。悪い暴力の支配の下から武力によって解放された民衆には、解放してくれた中共軍は好い暴力であるが、その暴力性について意識することはない。意識する思考の枠組みもなければ、したがって意識する意義がないからである。民衆は土地改革の過程で旧い秩序・権威に果敢に挑戦し、これを打倒したといわれるが、それができたのは四川省の場合、人民共和国とその軍隊の保護があったればこそであった（この点では、民衆には軍の保護もなく、蜂起によって軍に参加していった、ソビエト革命期の土地革命闘争の時とは異なっている）。「封建勢力」に反対し政治的に起ちあがることは容易であった。誰もが勇敢になり得た。し

かし、新しい秩序は新しい「好い暴力」によって上から作られていった。民衆の間に自発的な共同体的な場が欠如していたし、新政府も又、民衆の自主的団体には警戒心を持っていた。民間の宗教結社（会道門）などは哥老会などと同様な目で見られ、弾圧の対象とされた。この「好い暴力」装置のもとで、「悪い暴力」が復活してくる可能性等というものは、ほとんど考えられなかった。しかし、村や郷で上から任命される書記や委員は上級権力は恐れたが、民衆の世論を恐れる必要はなかった。国民の中に密告という卑劣な方法が制度化され、この制度を用いれば、都合の悪い批判的意見は「反動」「右派」「地主」といったような、党と国家の定めた公の分類に当てはめて処理することも可能であった。特に、人民公社体制が崩壊し、「改革・開放」の時代になり、資本主義経済が導入されると、地方の幹部の中から公金を横領し、過重な税金を課し、民衆の不満を暴力や司法機関との結託によって封じ込めるような悪徳幹部が出現し、中には省レベルにもそうした幹部が出現しているという。彼らは軍や学校、同郷、同族等々の複雑なネットワークを持っており、中には黒社会との繋がりのある者もいるという。(何清漣『中国現代化の落とし穴』草思社、2002年)。このように、新しい歴史的条件の下で、新しい悪覇が社会の一部に出現しつつある。歴史を繰り返さぬためには、共産党の自浄能力に待つということでは済まないであろう(国民党も一党独裁によって腐敗したのは教訓的である)。かといって、新たに「好い暴力」の出現を期待してひたすら耐えるというのも非現実的である。それよりも、それぞれの庇護者をもとめて、新しい悪覇やマフィアの下に走る方が個人的な困難を逃れるためには「現実的」な選択肢の一つかも知れない。それほどに、「悪覇」問題の社会的・歴史的根は深いのである。中国共産党はやっと近年になって、村長および村委員の民選を実施し始めた。これが、「新悪覇」の台頭の防止になるか、彼らの道具になるかは、予断を許さない。

(2003年8月10日　擱筆)